

22
南北の王
聖徒伝 115

「御言葉に立つ者の 責任と使命」

列王記第一 13～14章

ヤロブアムとレハブアムの罪

アウトライン

0. イントロダクション

I. 名もなき預言者の裁きの宣告 13章

II. ヤロブアムの末路 14章1～20節

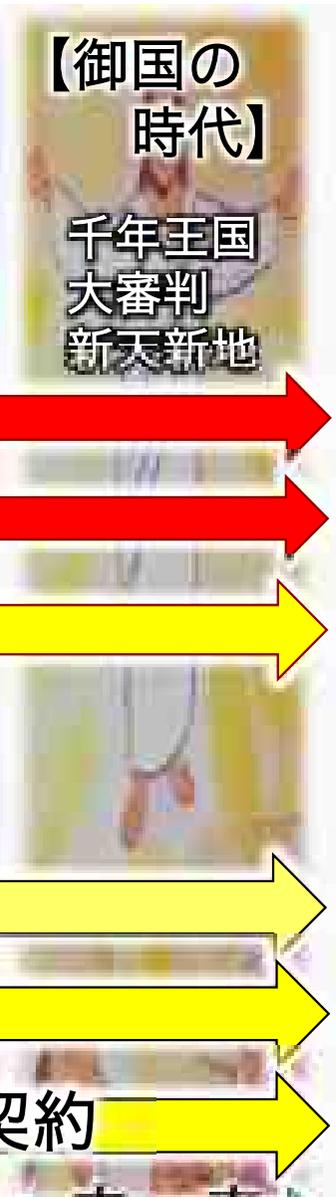
III. レハブアムの治世 14章21～31節

IV. まとめと適用

世にある信仰者の試練と希望



エフライムの山地



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

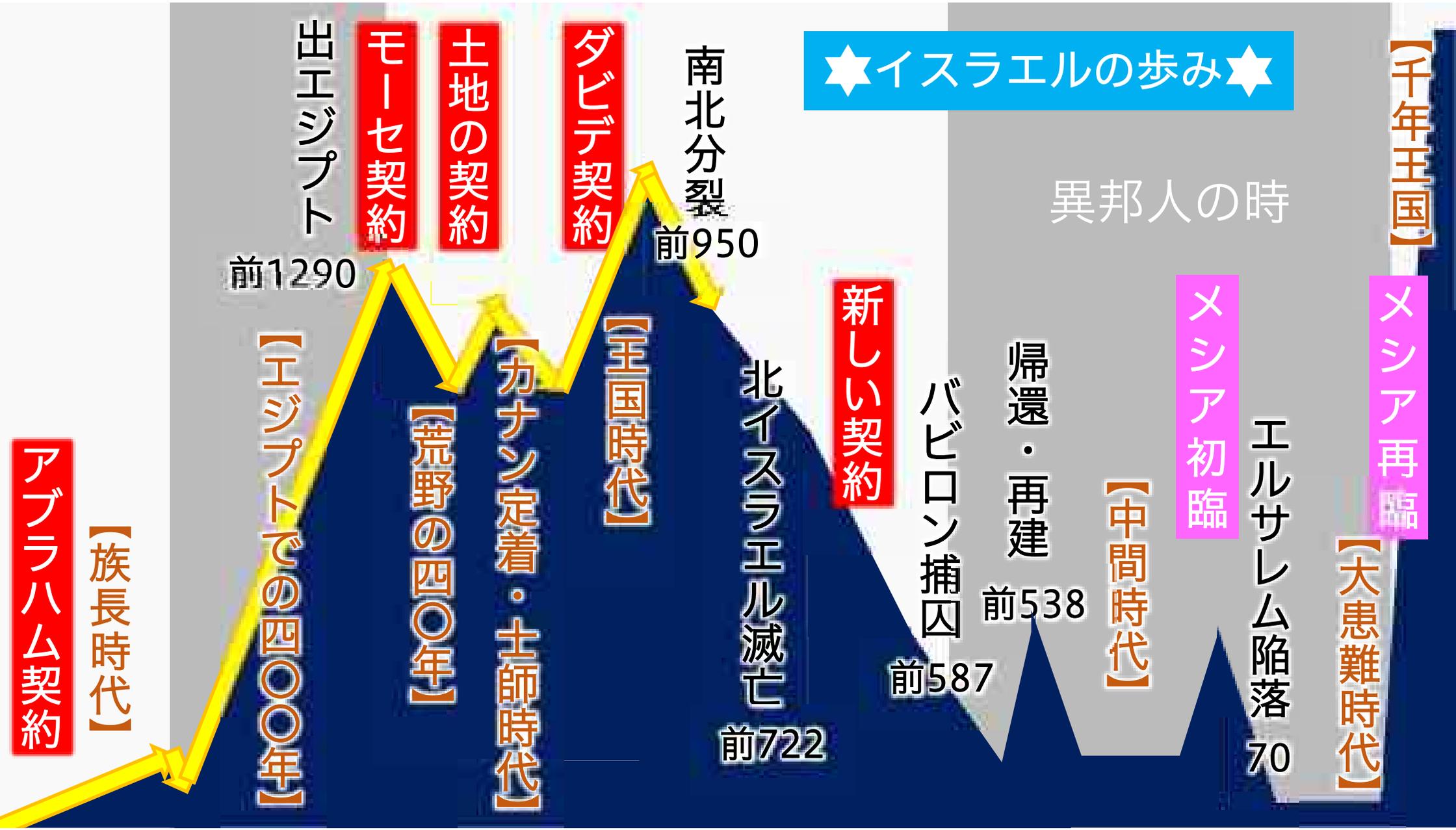
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

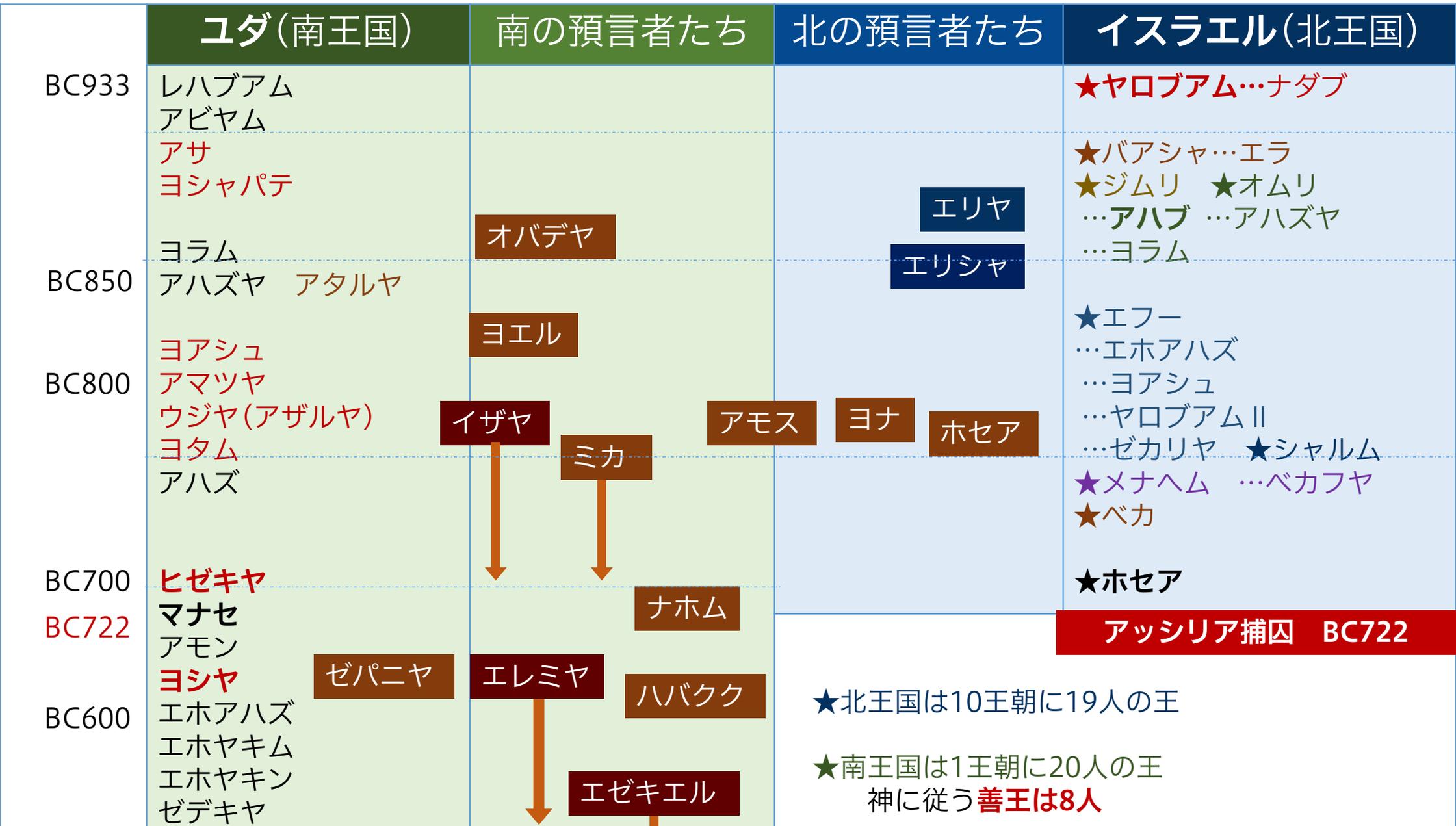
★イスラエルの歩み★



列王記 (第一〜第二)

第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ ホセア	
	2〜13章	預言者エリシャ			
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王



★北王国は10王朝に19人の王

★南王国は1王朝に20人の王
神に従う善王は8人

ソロモンの罪と悔い改め

■ 律法の警告に背き、異教徒の妻を多く娶り、軍事力を過大に増強し、私財を過剰に貯め込んだ。妻たちの**偶像礼拝**を認め、老年には、自らも偶像礼拝に取り込まれ、主から離れてしまった。

➔ 律法を熟知し、知恵を得、神の直接の警告を二度も受けながら。

■ **イスラエルの分裂**が裁きとして宣告。ソロモン存命中は猶予された。“都を破壊され、約束の地を追われる”、最悪の事態にはならず。

■ 主の裁きの軽減の背後に、ソロモンの悔い改めがあったのだろう。

「神を恐れよ。神の命令を守れ。伝道者12:13」➔伝道者の書の結論。

北王国の初代の王・ヤロブアム

- ヤロブアム = “神の民は戦う” エフライム族出身。
母はやもめ。苦労人だったのだろう。ソロモンの有能な家来だった。
- 預言者アヒヤから、**イスラエルの十部族の王**になると告げられる。
→ “**律法を守り、主に従うなら、その王位は代々継承される**”とも。
- エジプトに逃亡。ソロモンが死ぬまで時を待っていた。
- レハブアムの強権に反抗したイスラエルの離反後、十部族の王に。
領内に金の子牛を設置し、偶像礼拝を北王国にはびこらせることに。

預言者の系譜

- 預言者とは、「神の言葉を預かり、民に告げる者」
- アブラハムも、預言者と呼ばれた。(創世記20:7)
- 最も偉大な預言者が、モーセ。
- 最初に預言者を組織化したのが、サムエルだった。(1サム10章)
- ダビデが組織した奏楽隊は、預言者集団でもあった。(1歴25:1)
- 預言者たちは、神の律法を学び教え、時に神の直接の言葉を伝えた。



Ⅰ. 名もなき預言者の裁きの宣告

Ⅰ 列王記13章

シェケム

【神の人の来訪】 | 列王記13:1

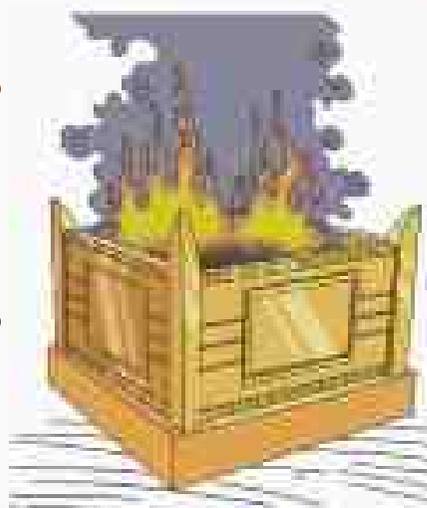
一人の神の人*が、【主】の命令によってユダからベテル*にやって来た。ちょうどそのとき、ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。

*神の言葉を取り次ぐ預言者のこと。

*ヤロブアムが金の子牛を立てた南の教界。

ヤコブが荒野で神の声を聞いた地。

■ 自らが勝手に作り上げた宗教の祭司役まで担っていたヤロブアム。



【北王国の末路】 | 列王記13:2

すると、この人は【主】の命令によって祭壇に向かい、これに呼びかけて言った。「祭壇よ、祭壇よ、【主】はこう言われる。『見よ、一人の男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ*。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

＊南王国の末期に登場する王がヨシヤ。

信仰回復と宗教改革を成し遂げる。

■ 290年後に実現した。



【しるし】 | 列王記13:3~4

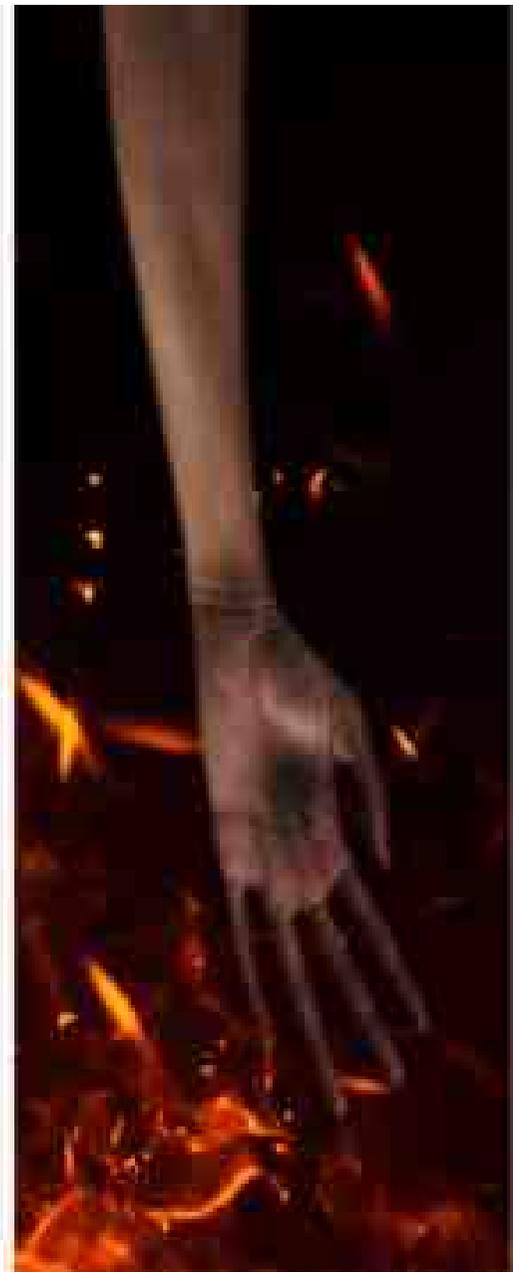
その日、彼は一つのしるし*を与えて、次のように言った。「これが【主】の告げられたしるし*である。見よ、祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。」

ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして「彼を捕らえよ」と言った。すると、彼に向けて伸ばしていた手はしなび*、戻すことができなくなった。

*預言者の告げた内容を**神の言葉**だと保証する奇跡

→重要なのは、奇跡そのものではなく、**神の言葉**

*使命を担う預言者を主が守り、罪を裁かれた。



【ヤロブアムの懇願】 | 列王記13:5~6

神の人が【主】のことばによって与えたしるしのとおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。

そこで、王はこの神の人に向かって言った。

「どうか、あなたの神、【主】にお願いして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手は元に戻るでしょう。」神の人が【主】に願ったので、王の手は元に戻り、前と同じようになった。

■ 直接、主に祈ることができないヤロブアム。

まるで異邦人のような、信仰が後退仕切った姿。



【王の申し出】 | 列王記13:7~8

王は神の人に言った。「私と一緒に宮殿に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたいのです。」すると神の人は王に言った。「たとえ、あなたの宮殿の半分を私に下さっても、私はあなたと一緒に参りません。また、この場所ではパンも食はず、水も飲みません*。」

■態度を改め、最上のもてなしを申し出たが…。

*一切の交わりを持ってはならないということ!!



【主の命令】 | 列王記13:9~10

「というのは、【主】のことばによって、『パンを食べてはならない。水も飲んでではない。また、もと来た道を通して帰ってはならない』と命じられているからです。」

こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、ほかの道を通して帰った。

■主が一切の交わりを禁じたということは？

➔偶像にまみれた北王国は、もはやけがれ同然。



【老預言者】 | 列王記13:11~12

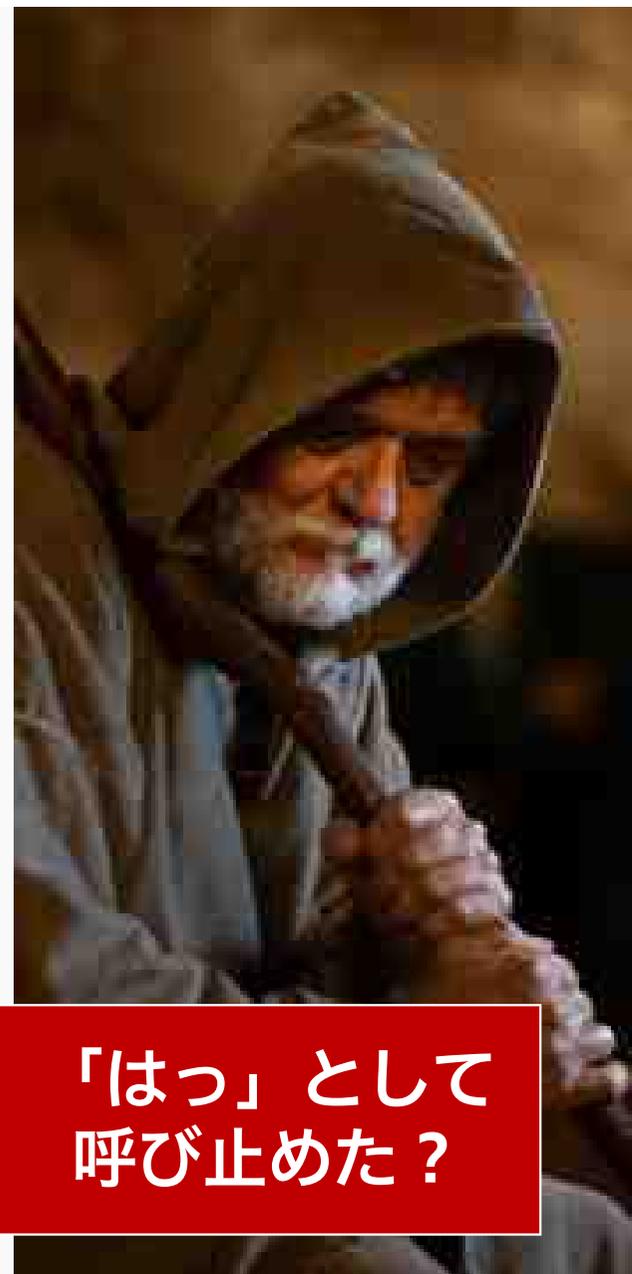
一人の年老いた預言者がベテル*に住んでいた。その息子たちが来て、その日、ベテルで神の人がしたことを残らず彼に話した。また、彼らは、この人が王に告げたことばも父に話した。

すると父は「その人はどの道を行ったか」と彼らに尋ねた。息子たちは、ユダから来た神の人が行った道を知っていた。

*金の子牛が祭られたベテルに住んでいた!!

➔信仰の道を外れた預言者なのは明らか。

王への宣告は、本来彼が果たすべき使命。



「はっ」として
呼び止めた？

【榿の木の下で】 | 列王記13:13~14

父は息子たちに「ろばに鞍を置いてくれ」と言った。彼らがろばに鞍を置くと、父はろばに乗り、神の人の後を追って行った。そして、その人が榿の木の下に座っている*のを見つけると、「ユダからおいでになった神の人はあなたですか」と尋ねた。その人は「私です」と答えた。

彼はその人に「私と一緒に家に来て、パンを食べてください」と言った。

*疲れて休んでいたのだろう。

➡使命を果たした直後に押し寄せる疲労感か？



【神の人の答え】 | 列王記13:16~17

するとその人は言った。「私は、あなたと一緒に引き返して、あなたと一緒に行くことはできません。また、この場所では、あなたと一緒にパンも食べず、水も飲みません。

というのは、私は【主】のことばによって、『そこではパンを食べてはならない。水も飲んではならない。もと来た道を通って帰ってはならない』と言われているからです。」

■一切交わるなどは、北王国は主の目にもはやけがれた地と見なされていたということ。

異邦人の地・同様の扱い



【老預言者の嘘】 | 列王記13:18~19

彼はその人に言った。「私もあなたと同じく預言者です。御使いが【主】のことばを受けて、私に『その人をあなたの家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と告げました。」こうして彼はその人をだました。

そこで、その人は彼と一緒に帰り、彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。

■ 神のことばが、不条理に翻されることはない。

➡ 老預言者の嘘は言語道断だが、
より重く責任が問われるのは、真実の預言者。

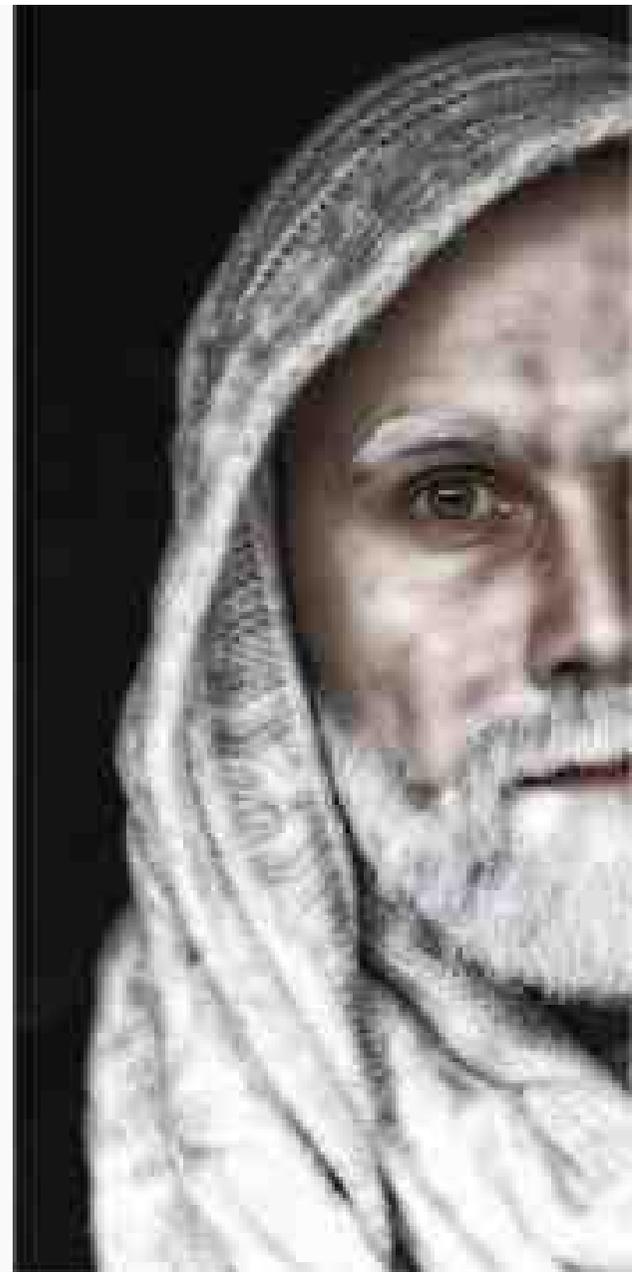


【主のことば】 | 列王記13:20~22

彼らが食卓に着いていたとき、その人を連れ戻した預言者に【主】のことばがあったので、彼は、ユダから来た神の人に呼びかけて言った。

「【主】はこう言われる。『あなたは【主】のことばに背き、あなたの神、【主】が命じた命令を守らず、引き返して、主があなたに、パンを食べてはならない、水も飲んでではならないと言った場所でパンを食べ、水を飲んだので、**あなたの亡骸は、あなたの先祖の墓には入らない***。』」

***この地で神に打たれて死ぬということ。**



【神の人の死】 I 列王記13:23～24

彼はパンを食べ、水を飲んだ後、彼が連れ帰った預言者のために、ろばに鞍を置いた。

その人が出て行くと、獅子が道でその人に会い、その人を殺した。死体は道に放り出され、ろばは、そのそばに立っていた。獅子も死体のそばに立っていた。

■ 死体を口にせず、ろばに手を出さないライオン。

➡ 特異な状況の背後に暗示される神の裁き

■ “主の約束をたがえてはならない”

神の言葉の厳しさを身をもって示した死だった。



【悲報】 I 列王記13:25～26

そこを人々が通りかかり、道に放り出されている死体と、その死体のそばに立っている獅子を見た。彼らは、あの年老いた預言者の住んでいる町に行き、このことを話した。

その人を途中から連れ帰ったあの預言者は、それを聞いて言った。「それは、【主】のことばに背いた神の人だ。【主】が彼に告げたことばどおりに、【主】が彼を獅子に渡され、獅子が彼を裂いて殺したのだ。」

- 目撃者たちは、神の業だと分かってざわついた。預言者の警告は、北王国全体に対するものでも。



【神の人の遺体】 | 列王記13:27~28

そして、息子たちに「ろばに鞍を置いてくれ」と言ったので、彼らは鞍を置いた。

彼は出かけて行って、道に放り出されている死体と、その死体のそばに立っている、ろばと獅子を見つけた。獅子はその死体を食わず、ろばを引き裂いてもいなかった。



【老預言者の嘆き】 | 列王記13:29～30

そこで、年老いた預言者は神の人の遺体を取り上げ、それをろばに乗せて自分の町に持ち帰り、悼み悲しんで葬った。

彼が遺体を自分の墓に納めると、皆はその人のために、「ああ、わが兄弟」と言って悼み悲しんだ。

■ その死の直接的な責任は、彼自身にある。

使命を忘れ、主から外れた預言者の嘆きとは？



【老預言者の願い】 | 列王記13:31~32

彼はその人を葬った後、息子たちに言った。

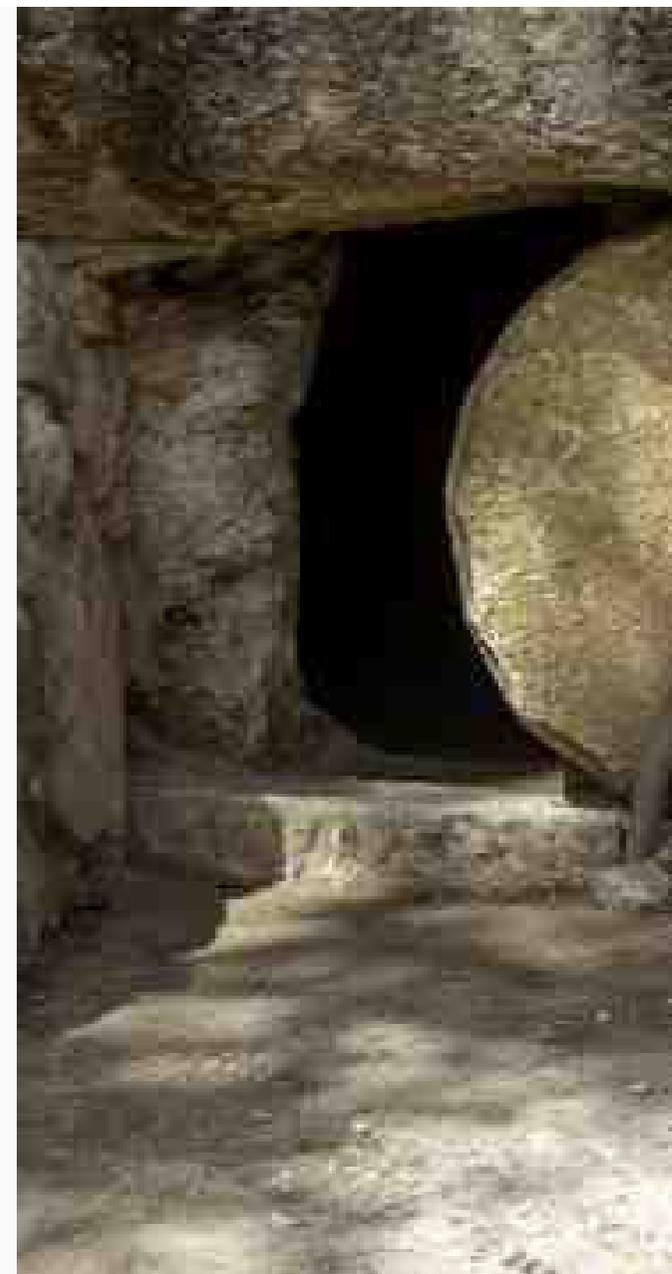
「私が死んだら、あの神の人を葬った墓に私を葬り、あの人の骨のそばに私の骨を納めてくれ*。

あの人が【主】のことばにしたがって、ベテルにある祭壇とサマリアの町々にあるすべての高き所の宮に向かって叫んだことばは、必ず成就するからだ。」

*墓に1年ほど遺体を安置した後、

骨を拾い、石の四角い骨壺に収めた。

■今度こそ、死んだ後にいたるまで、預言者の使命を果たそうと心に刻んだのだろう。



【悔い改めないヤロブアム】 | 列王記13:33~34

このことがあった後も、ヤロブアムは**悪い道**から立ち返ることをせず、引き続き一般の民の中から高き所の祭司たちを任命し、だれでも志願する者を任職して高き所の祭司にした。

このことは、ヤロブアムの家の罪となり、ついには大地の面から根絶やしにされることとなった。

■悔い改めなく、神にますます背いたヤロブアム。

➔自らと一族の身に最悪の結果を招くことに。



主の憐れみを侮り通せば、厳しい刈り取りが待っている



II. ヤロブアムの治世の末路 | 列王記14章1～20節

荒野のアカシア

【アヒヤのもとへ】 | 列王記14:1

このころ、ヤロブアムの子アビヤが病気になったので、ヤロブアムは妻に言った。「さあ、変装し、ヤロブアムの妻だと分らないようにしてシロへ行ってくれ。そこには、私がこの民の王となることを私に告げた預言者アヒヤがいる。

パン十個と菓子数個、それに蜜の瓶*を持って彼のところへ行ってくれ。彼は子どもがどうなるか教えてくれるだろう。」

*王には粗末すぎる贈り物は偽装のためだろうが、子の命乞いをするには、いかにも貧相すぎる。

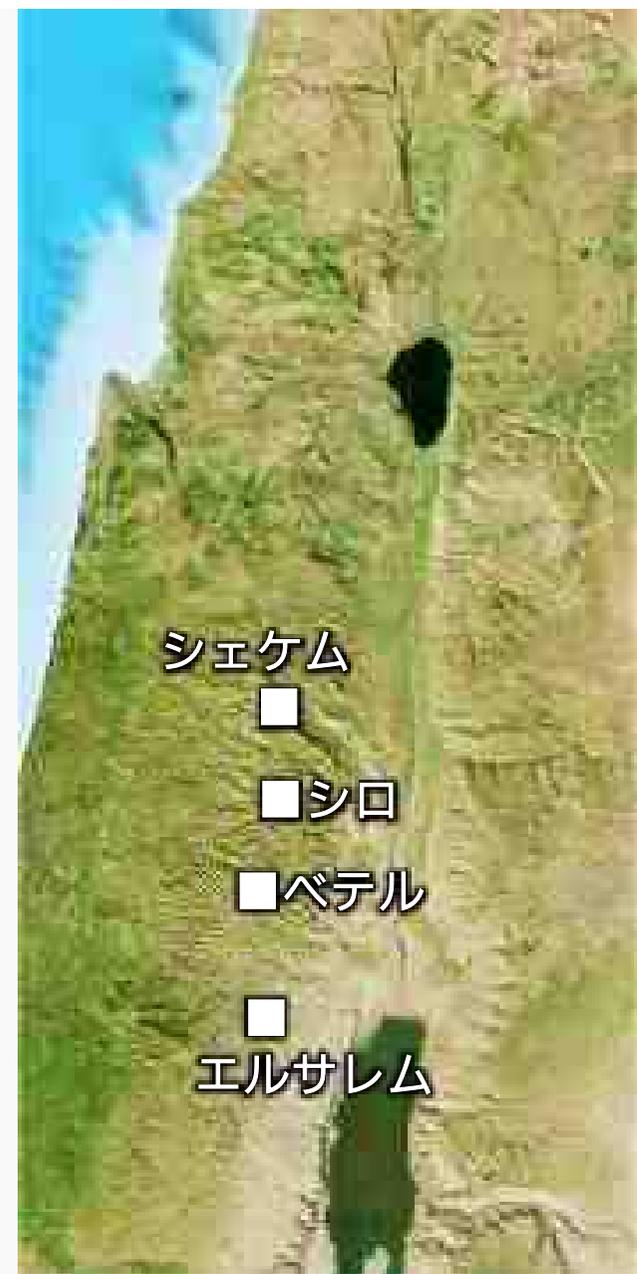


【シロの預言者アヒヤ】 | 列王記14:4~5

ヤロブアムの妻は言われたとおりにして、シロ*へ出かけ、アヒヤの家に行ったが、アヒヤは年をとって目がこわばり、見ることはできなかった。

しかし、【主】はアヒヤに言われた。「今、ヤロブアムの妻が来て、子どものことをあなたに尋ねようとしている。その子が病気だからだ。あなたは、これこれのことを彼女に告げなければならない。入って来るときには、彼女はほかの女のようなふりをしている。」

*ヨシュアが12部族の土地のくじ分けをした地
サムエル時代には主の幕屋が張られていた時も。



【アヒヤの宣告】 | 列王記14:6~8

アヒヤは、戸口に入って来る彼女の足音を聞いて言った。「入りなさい、ヤロブアムの妻よ。なぜ、ほかの女のようなふりをしているのですか。私はあなたに厳しいことを伝えなければなりません。

行って、ヤロブアムに言いなさい。イスラエルの神、【主】はこう言われる。『わたしは民の中からあなたを高く上げ、わたしの民イスラエルを治める君主とし、ダビデの家から王国を引き裂いて、あなたに与えた。しかしあなたは、わたしのしもべダビデのようではなかった。ダビデはわたしの命令を守り、心を尽くしてわたしに従い、ただ、わたしの目にかなうことだけを行った。』



【ヤロブアムの末路】 | 列王記14:9~11

「ところがあなたは、これまでのだれよりも悪いことをした。行って自分のためにほかの神々や鑄物の像を造り、わたしの怒りを引き起こし、わたしをあなたのうしろに捨て去った。

だから、見よ、わたしはヤロブアムの家にわざわざいをもたらず。イスラエルの中の、ヤロブアムに属する小童から奴隷や自由な者に至るまで絶ち滅ぼし、人が糞を残らず焼き去るように、ヤロブアムの家の跡を除き去る。

ヤロブアムに属する者は、町で死ぬなら犬がこれを食らい、野で死ぬなら空の鳥がこれを食らう。』【主】が、こう言われたのです。」



【子の死】 | 列王記14:12~13

さあ、家に帰りなさい。あなたの足が町に入るとき、その子は死にます。

全イスラエルがその子のために悼み悲しんで葬るでしょう。ヤロブアムの家のもので墓に葬られるのは、彼だけです。ヤロブアムの家の中で、彼だけに、イスラエルの神、【主】のみこころにかなうことがあった*からです。

*アビヤ = “ヤハウエはわが父”

その名にふさわしい信仰者だったのだろう。



【捕囚の宣告】 I 列王記14:14~16

【主】はご自分のためにイスラエルの上に一人の王を起こされます。彼はその日、いや、今にもヤロブアムの家を絶ち滅ぼします。

【主】はイスラエルを打って、水に揺らぐ葦のようにし、彼らの先祖に与えられたこの良い地の面からイスラエルを引き抜き、あの大河の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシェラ像を造って【主】の怒りを引き起こしたからです。

ヤロブアムが自分で犯した罪と、彼がイスラエルに犯させた罪のゆえに、主はイスラエルを捨てられるのです。」

約200年後のアッシリア捕囚が宣告された



【息子の死】 | 列王記14:17~18

ヤロブアムの妻は立ち去って、ティルツァ*に着いた。彼女が家の敷居をまたいだとき、その子は死んだ。

人々はその子を葬り、全イスラエルは彼のために悼み悲しんだ。【主】がそのしもべ、預言者アヒヤによって語られたことばのとおりであった。

*おそらく別邸で子を看病していたのだろう。

■死んだアヒヤは、ヤロブアムの長男だろう。後を継がせようという時に死にいたった。



【】 I 列王記14:19～20

ヤロブアムについてのその他の事柄、彼がいかに戦い、いかに治めたかは、『イスラエルの王の歴代誌』にまさしく記されている。

ヤロブアムが王であった期間は二十二年であった。彼は先祖とともに眠りにつき、その子ナダブ*が代わって王となった。

*ナダブ = “寛大な”

➔ 厳格に排除すべき偶像礼拝に寛大なら？

■ 主の御心にかなうアビヤの死の記述で、ヤロブアムの治世は終わっている。

北王国は滅びにひた走る

Ⅲ. 南王国レハブアムの治世

Ⅰ 列王記12章25～33節



エルサレムの東に広がる荒野

【レハブアムの出自】 | 列王記14:21~22

ユダではソロモンの子レハブアム*が王になっていた。レハブアムは四十一歳で王となり、【主】がご自分の名を置くためにイスラエルの全部族の中から選ばれた都、エルサレムで十七年間、王であった。彼の母の名はナアマ*といい、アンモン人*であった。

*“大きくされた民” → 傲慢が肥大化しては…。

*“愛くるしい” → ソロモンの寵愛を受けたか。

*口トの娘(妹)が先祖。性的墮落、姦淫の民。

「申 23:3 アンモン人とモアブ人は【主】の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して【主】の集会に加わることはできない。」



ソロモンの
不信仰の
置き土産!!

【ユダの偶像礼拝】 | 列王記14:23～24

ユダの人々は【主】の目に悪であることを行い、彼らが犯した罪によって、その先祖たちが行ったすべてのこと以上に主のねたみを引き起こした。

彼らも、すべての高い丘の上や青々と茂るあらゆる木の下に、高き所や、石の柱や、アシェラ像を立てた。

この国には神殿男娼もいた。彼らは、【主】がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、すべての忌み嫌うべき慣わしをまねて行っていた。

偶像礼拝に完全に呑み込まれた

「申7:26 忌み嫌うべきものをあなたの家に持ち込んで、あなたもそれと同じように聖絶されたものとなつてはならない。」



アシェラ像、バアルの妻、豊穡の女神、命の木、木の柱がシンボル

【エジプト王シシャク】 | 列王記14:25～28

レハブアム王の第五年に、エジプトの王シシャク*がエルサレムに攻め上って来て、【主】の宮の財宝と王宮の財宝を奪い取った。彼は何もかも奪い取った。ソロモンが作った金の盾もすべて奪い取った。

レハブアム王は、その代わりに青銅*の盾を作り、これを王宮の門を守る近衛兵の隊長の手に託した。

王が【主】の宮に入るたびに、近衛兵がこれを運び、また近衛兵の控え室に戻した。

【シシャクの腕輪】
ユダから奪い取った
金できたものかもし
れない



*ソロモンから逃亡したヤロブアムを保護していた。

*銅はソロモン時代には価値のないものだった…。

【レハブアムの死】 | 列王記14:29～31

レハブアムについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、それは『ユダの王の歴代誌*』に確かに記されている。レハブアムとヤロブアムの間には、いつも戦いがあった。

レハブアムは先祖とともに眠りにつき、先祖とともにダビデの町に葬られた。彼の母の名はナアマといい、アンモン人であった*。彼の子アビヤム*が代わって王となった。

終始、神の計画の部外者だったレハブアム

*現存しない。 *繰り返されるレハブアムの出自。

*“ヤハウエはわが父” or “その海はわが父”

次の王はどちらに向く？





IV. まとめと適用

世にある信仰者の試練と希望

エフライムの夕景

【北のヤロブアムと南のレハブアムの罪】

- 変わらない主の約束が、個々の王を支える土台だった。
主の掟と命令に、従うならば祝福され、背くならば裁かれる。
- ヤロブアムは、主を信頼仕切れず、金の子牛を建てた。
レハブアムは、最初からソロモンの過ちの偶像礼拝を引き継いだ。
- ヤロブアムは、警告を受けながら拒み通し、滅びの宣告を受けた。
レハブアムにいたっては、最初から神の御心の内にはいなかった。

主の命令に従っているか否か。この原則自体は変わらない。

【死んだ預言者の罪に学ぶこと】

- 死んだ預言者の過ちは、**神の言葉を退け、偽預言を信じたこと。**
使命を果たしきるまで変わらない**神の命令を、結果的に拒んだ。**
- 御言葉を正しく学び知る者が、**主の命令から離れてしまうなら？**
偽預言に囚われる者には、**重い責任が問われることを自覚しよう。**
- この教会時代の信仰者への命令は、携拳の瞬間まで変わらない。
福音を告げ、御言葉を解き明かしていこう。
ちまたにあふれる偽預言に決して惑わされることのないように!!

【世における信仰者の苦難を知ろう】

- 死んだ偽預言者には、敵地へ単身乗り込む**信仰**と**勇気**があった。裁きを告げる厳格な神の言葉に傷をつけたのは事実としても、私たち、人の目には、その死はあまりにも条理にも見える。
- 死んだヤロブアムの息子アビヤも、主が認めた**信仰者**だった。
- 完全にきよい方が、最悪の十字架刑を受けた事実を思い起こそう。世にあって、**信仰者には、正しさゆえに苦難がある。**

私が受けるべきと主が言われる、私の十字架とは何だろうか？

【変わらない人の現実・変わらない神の約束】

- 歴史学者たちのある対談での質問 「コロナ禍で人は変わるか？」
「変わらない」が全員の答え。人の本質は変わらないと歴史は教える。
- 事実と事実、過ちを過ちを認めることが、どれほど人には困難か。
人間は、どこまでも不合理で感情的で、思い込み強く、不安定だ。
- 人の愚かさを、さらけ出して記す聖書にこそ、真実の答えはある。
なぜ？ と浮かび上がるその問いを、自分自身にこそ向けよう。

心にひっかかるその人物は、私自身の姿だと知ろう

【滅びに向かって加速する、この世界のただ中で】

- 人の愚かさの渦は、回り回って拡大し、勢いをます一方だ。コロナ禍は、滅びにひた走る人類をさらに加速させている。進む社会の分断、エネルギーや物資の不足、出生数の急減…。
- 人に人の問題は解決できない。自分の身すら手には負えない。**救いはただ、主にのみある。**人となり、罪を負われた子なる神に。**完全に人であり、神である主イエスだけが、すべてを解決される。**聖書の学びを重ね、日々味わい、身をもって主を知り続けていこう。

王の王、主の主、再臨の主を待ち望む信仰をこそ育もう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

世の闇(やみ)は ますます深(ふか)まりますが、わたしの内(うち)には
主イエスの栄光(えいこう)が 宿(やど)られています。

世の光として、どうか わたしを用いてください。

暗闇(くらやみ)の中にいる人に、あなたの真実(しんじつ)の光を
届けることができますように。

永遠(えいえん)の ゆるがぬ希望(きぼう)が、絶望(ぜつぼう)の
底(そこ)にある魂(たましい)に 与えられますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」